

## スペイン語へのいざない

(2009年3月掲載)

竹村文彦 (スペイン語部会/スペイン・ラテンアメリカ文学)

「スペイン語は神と話すための言葉」——十六世紀の神聖ローマ帝国皇帝カルル五世の言葉だ。スペインの空のように澄み渡り、響きのよいスペイン語は、なるほど崇高な存在と語るのにふさわしい。十数ヶ国語に通じた私の恩師の一人K先生も、「スペイン語を音読していると、他の言語では感じられない生理的な快感を覚える」と言っていた。日本語と同様、母音の数は五つだけで、口を大きく開けてローマ字読みをすれば、「うまい！」とほめられる。発音が平易で、語彙も英語とかなり共通するから、日本人にとっては取り組みやすい。スペイン本国はもちろん、ブラジルを除くラテンアメリカ諸国や、アメリカ合衆国の一部でも使われており、その母語人口は世界の言葉の中でも有数の約三億五千万人。



ベラスケスやゴヤといった画家、ガウディのような建築家、ブニュエルやアルモドバルといった映画監督、さらにはインカ・アステカ文明などの古代遺跡——スペイン語の背後には豊かで多彩な文化が広がる。私の専門である文学に話を限れば、まずはスペイン文学随一の名作たるセルバンテスの『ドン・キホーテ』。卑近な日常を描くことが芸術たり得ることを示した近代小説の元祖である。二十世紀では詩人・劇作家のガルシア・ロルカが、人間の原初的な本能の激しい燃焼を描いた。ラテンアメリカに目を転ずると、アルゼンチンのボルヘスは人類の知の歴史をわずか数ページの短篇小説の中に凝縮させ、コロンビアのノーベル賞作家ガルシア・マルケスやペルーのバルガス・リョサらは、南米大陸の混沌として熱気あふれる風土を舞台に壮大な物語世界を紡いだ。

スペイン語部会では、皆さんに楽しくスペイン語を学んでもらえるようホームページを開設し、教員の手作りのビデオ作品、写真、エッセイなど盛りだくさんの内容を公開している (<http://spanish.ecc.u-tokyo.ac.jp/>)。



「スペイン語部会」でぜひ検索してください。